

3 動物

遠く海外から到来する動物というのは、古今東西、常に人々の関心の的となってきた。

江戸時代には、それまでの日本人が見たこともないような様々な動物が、オランダ船や清船によって次々にもたらされた。本草学者たちはその動物たちに大きな刺激を受け、それが日本独自の博物学が開花する要因の一つともなった。また、民衆の間では珍獣奇鳥の見世物が全国各地で行われ、多大な人気を博した。殊に江戸の人々の人気を集めたのは、享保の象と文政のラクダであった。

享保13年（1728）6月13日、将軍徳川吉宗の命により、雌雄2頭の象がベトナムから長崎へ入港した。雌象は9月に死に、翌享保14年（1729）3月、雄象のみが陸路を長崎から江戸へ向かった。象の来日はこの時が5回目であったが、広く庶民が象を見たのはこれが初めてだった。町には象の瓦版が出回り、象の絵やおもちゃを売るものも多くいたと伝えられている。この時期、象を主題にした刊本も次々と出版された。

文政4年（1821）7月、オランダ船がヒトコブラクダの雌雄2頭を船載した。将軍家に献上する目的で連れてこられたラクダであったが、幕府から不要とされたため、しばらくそのまま出島で飼育されていた。文政6年（1823）2月、通詞に贈呈する形でラクダはオランダ側から日本側へ引き渡され、紆余曲折を経て、ついには興行師の手に渡ったのである。このラクダは10年以上、全国津々浦々で見世物となった。この見世物の記事が各種随筆類に見られるほか、象と同様に、ラクダを主題とする解説書もいくつかこの時期に書かれている。

江戸時代に到来した珍獣としては他に、ヤマアラシ・オランウータン・ジャコウネコ・ジャワマメジカ・ハクビシンなどがある。

生きた動物だけでなく、舶来の書籍の知識と図画もまた、蘭学者や本草学者、画家たちに大きな影響を与えた。ヨンストン著『動物図譜』（Johannes Jonstonus, *Historiae naturalis*）、ドドネウス著『草木譜』（Rembert Dodoens, *Cruydt-boeck*）などは、西洋博物学の代表的著作と見なされ、一枚ものの掛け軸から随筆の挿画まで、盛んにその図画の転写が行われた。

江戸時代以前から日本人にとってなじみ深く、しばしばその姿が描かれてきた動物が馬である。武士にとって馬は刀剣甲冑と並ぶ大切な武具の一つであり、多くの名馬の話が書き継がれてきた。また、馬を主題にした著作の中には、飼育という観点に立ったものも多くある。馬医の歴史も古く、鎌倉時代の『馬医草紙』が日本最初の獣医書であると言われる。

本草学という学問が日本に輸入されて以来、本草学者たちにとっては、中国の本草書に見える「名」が目の前の「物」のどれに比定できるのかということが、常に重要な課題としてあった。北海道やその北のサハリンなどからアイヌ語の名称の物品が江戸へ入ってくるようになると、「名」と「物」の対照はますます複雑さを増した。これらの成果を記した本草書には、AがBであることの説明やその典拠だけでなく、AがBであると確信した時の喜びも併せて書かれており、当時の本草学者たちの日常のあり方をうかがい知ることができる。

3-1 象志 (ぞうし)



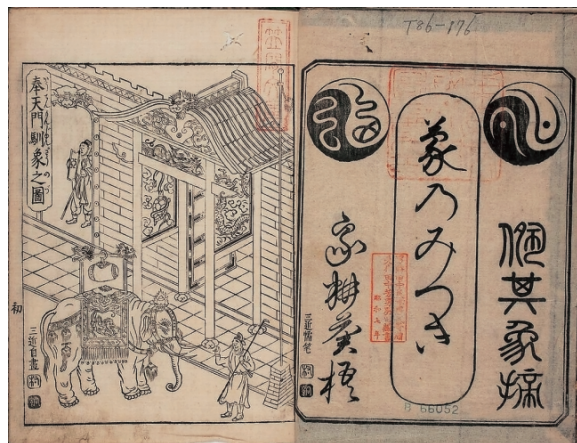
享保14 [1729] 刊 大坂等 安井嘉兵衛等
1冊 【書庫 T86 : 111】 [田中芳男文庫]

享保13年 (1728) に象が長崎に渡来したことを契機として作られた本で、象に関する内容を一冊にした単行本の始まりである。内容としては、象の形態・習性・故事来歴・説話などが集められている。

一般にこの書の著者は不明となっているが、末尾に「京師本國寺塔頭智善院撰」の付刻を持つ

版があること、仏典の中の普賢菩薩と白象に注目した記述が見られることなどから、京都の仏僧が書いたものだとする説もある。

3-2 象のみつき (ぞうのみつき)



中村平五撰・画 享保14 [1729] 刊 大坂等
安井嘉兵衛等 1冊 【書庫 T86 : 176】 [田中
芳男文庫]

中村平五 (1671 - 1741) は京都の人で、山崎闇斎 (1618 / 19 - 1682) の学を学んだ儒者である。

本書も『象志』と同様、様々な文献から象に関する記述が引用されているが、子どもでも理解しやすいよう、平仮名まじりで平易な表現を

用いて書かれていることを特徴とする。冒頭、享保13年 (1728) 渡来の象について書かれているが、象の母子の別れ話に「日本は神国」という表現が登場するなど、著者による創作的な記述も見られる。

3-3 橐駝考 (たくだこう)



它山唐公愷稿 安西武臣虎吉校
文政7 [1824] 序刊 江戸 和泉屋金右衛門
1冊 【書庫 T86:120】 [田中芳男文庫]

堤它山 (1783-1849) は江戸時代後期の儒者で、文政4年(1821)に渡来したラクダに触発されて、本書を出版した。江戸の文人・山崎美成(1796-1856)が校閲をし、序文を寄せている。巻頭のラクダの絵は、書家の関思亮(1796-1830)による。文字はオランダ通詞の吉雄忠次郎(1787-1833)が書いたもので、“Kameel pleister Zonder Weerga.”(天下無比のラクダの石膏)とある。

3-4 橐駝纂説 (たくださんせつ)



松本胤親輯 写本 1冊 【書庫 T86:119】
[田中芳男文庫]

松本胤親(?-1841)は江戸時代後期の武士で、蘭学に通じ、渡辺崋山(1793-1841)などとも親交があった。

『橐駝考』と同じく、文政4年(1821)にラクダが来日したことを契機として著されたものだが、成立年は不明。日本・中国・オランダの諸書からラクダについての記事を引用し、まとめている。巻頭に諸書のラクダの絵の転写が集めてある。「文政四年六月和蘭人献此」と題された絵は、『橐駝考』の口絵と構図が全く同じであるが、どちらかがどちらかの転写であるか、あるいは両者が参照した第三の絵があるのかについてはわかっていない。

3-5 雲錦隨筆 4巻 (うんきんずいひつ)



暁晴翁著 [松川半山画] [明治] 刊本 大坂 忠雅堂 1冊 【書庫 A90:453】

著者の暁晴翁(1793-1861)は大坂の人で、暁鐘成の狂名で知られる。はじめ狂歌、のち戯作、雑書を編述し、画にも巧みだった。還暦を迎えた年に、鐘成の号を門人に譲り、晴翁と名乗った。同時に著作活動においては、ほぼ文筆業に専念し、挿画の一切を友人の浮世絵師・松川半山(1818-1882)に委ねた。本書の挿画も

半山による。

晴翁は、文政4年(1821)に渡来したラクダが同5年(1822)に大坂で見世物となった際に見物している。「駱駝之図」と題した左にあるのは当時流行した狂歌で、「首は鶴 背中は亀に 似たりけり 千歳らくだ 万ざいらくだ」とある。絵の左上の漢詩は、中国の宋代の詩人・梅堯臣(1002-1060)の「橐駝」という詩である。

3-6 兼葭堂雑録 5巻 (けんかどうざつろく)



[木村兼葭堂稿] 暁晴翁撰 松川半山画 安政6 [1859] 刊 江戸 3冊 【書庫 鷗A90:299】 [鷗外文庫]

本書は木村兼葭堂(1736-1802)の死後、4代目兼葭堂主人の依頼で暁晴翁が遺稿をまとめた随筆集である。挿画は『雲錦随筆』と同じく松川半山による。

木村兼葭堂は大坂で造り酒屋を営むかたわら、本草学に傾倒した町人である。書齋の名で

ある兼葭堂を号としても用いた。その書齋に集められた博物奇品および書籍のコレクションは有名で、浪華に来て兼葭堂を訪れない本草家・文化人はいないとまで言われたほどであった。

描かれたヤマアラシは、安永元年(1772)に薩摩藩が2匹購入したうちの1匹である。安永2年(1773)に大坂で見世物となっていたものを兼葭堂が見物し、その際の見聞を記した。残るもう1匹は薩摩藩から田沼意次(1719-1788)に献上され、のち幕府から田村藍水(1718-1776)に下賜されている。

3-7 蘭畹摘芳 3巻 (らんえんてきほう)



〔大槻〕 磐水先生訳定 〔大槻〕 玄幹、山村才
輔校 吉川良祐 〔ほか〕 筆録 文化14 [1817]
刊 江戸 須原屋茂兵衛等 1冊
【書庫 A90 : 898】 〔田中芳男文庫〕

蘭学者の大槻玄沢（磐水、1757-1827）による、西洋の薬品や図書などの質問に対する回答、および翻訳と解説を、門下生らが40年にわたって書き留めていた。この筆録は当初「帳中の秘」とされていたが、強い出版の要望があり、玄沢が手を入れた上で刊行に至った。それが本書である。玄沢は蘭学に通じた医者として、『解体新書』の重訂などにも携わっている。

本書「阿郎悪烏當（オランオウタン）」の項目には、蘭書からの引用の他に、寛政4年（1792）および同12年（1800）渡来のオランウータンについての記述があるが、「阿郎烏烏當寫真図」は寛政12年に長崎にやってきた個体を描いたもので、絵を描いたのは長崎の画家・荒木如元（1765-1824）である。

3-8 紅毛雑話 5巻 (こうもうざつわ)



森島中良編輯 天明7 [1787] 序跋 大坂 塩
屋喜助 寛政8 [1796] 印 5冊
【書庫 J70 : 117】 〔南葵文庫〕

著者の森島中良（1754-1808）は江戸時代中期の蘭学者で、森羅万象の名で戯作者としても知られる。本書は、幕府医官であった兄の桂川国瑞（1751/54-1809）が来日していたオランダ人から聞いた話や、蘭学者の集まりで交わされた会話を基に記された随筆集で、当時の蘭学者たちの日常的な話題が集められている。

獅子の絵は、本物のライオンを見て描かれたのではなく、江戸の洋画家・馬孟熙（北山寒巖、1767-1801）による、ヨNSTON著『動物図譜』所載の挿絵の模刻である。

3-9 古今名馬図彙 3巻 (ここんめいばずい)

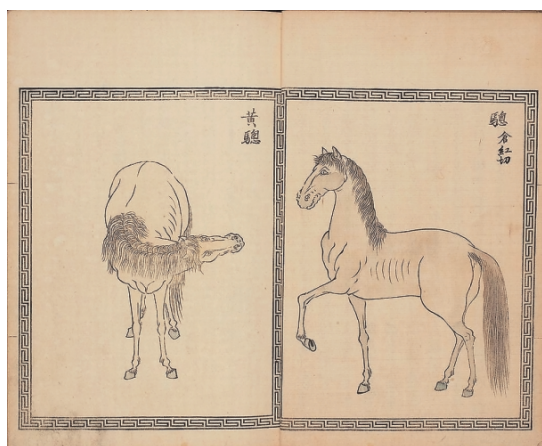


栗原信充 (柳庵) 編・画 刊本 金花堂蔵版
題箋書名は古今名馬図絵 3冊
【書庫 T86 : 168】 [南葵文庫]

編者の栗原信充 (1794-1870) は、江戸後期の故実家。屋代弘賢 (ひろかた) に有職故実をまなび、弘賢の『古今要覧稿』の編集をたすけ、また『武器袖鏡』『刀剣図考』など武家故実に関する著作も多い。勤皇思想及び当時の武士階級の惰弱を憂慮し古武士道を鼓吹した。

本書は、日本及び中国の古今の名馬について簡単な説明を付記した色刷画27点よりなっている。巻二第十丁で「厩猿」で猿が描かれているが、猿は馬の守り神である。

3-10 華陽皮相 2巻 (かようひそう) 華陽皮相原稿 2巻 (かようひそうげんこう)



平沢旭山著 江都 [江戸] 寛政元 [1789] 刊
華陽皮相は2冊、華陽皮相原稿は1冊
【書庫 T86 : 112】 [田中芳男文庫]

平沢旭山 (きょくざん) は山城国宇治出身の漢学者。本書は馬の毛色を和文で説明したもの。色刷画35点を入れる。『華陽皮相原稿』は漢文で、和文に対応する。これには画がない。

3-11 厩馬新論 (きゅうばしんろん)



龍山堂主人著 拓善居 嘉永7 [1854] 1冊
【書庫 XA60 : 42】 [南葵文庫]

著者の経歴は不詳。本書は少ない経費で馬を飼う方法について、厩の建て方や飼料の与え方などについて書かれている。一方、馬の飼養管理及び疾病の診断要領の概要が記述されており、徳川時代における漢方獣医学を知るための文献でもある。なお、掲載している図版には、牧場で野馬を採る様子が描かれている。

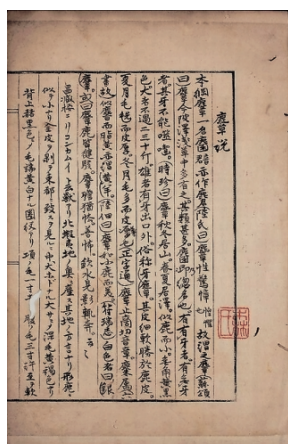
3-12 北蝦夷圖説 4巻 (きたえぞづせつ)



間宮倫宗口述 秦貞廉編 橋本玉蘭齋、重探齋
画 安政2 [1855] 刊 江戸 播磨屋勝五郎
1冊 【書庫 J30 : 881】 [南葵文庫]

本書は、探検家として有名な間宮林蔵（倫宗、1775-1844）の、樺太探検の記録である。別名に『銅柱餘録』ともいう。北蝦夷とは、蝦夷島（北海道）の北の樺太（サハリン島）を指す。北海道にはいないが、樺太にいた動物として、「トナカイ」と「リキンカモイ」の二種を挙げている。

3-13 麿説 (しょうせつ)

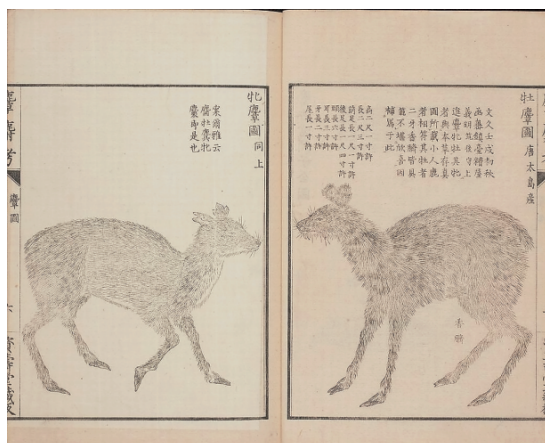


栗本瑞見著 文政3 [1819] 跋 自筆本 1冊
【貴重書 A00 : 5841】 [田中芳男文庫]

本草学者・栗本丹洲（瑞見、1756-1834）の自筆本で、森立之（1807-1885）の自筆奥書によれば、丹洲の孫の大淵棟庵（1816-1889）から、明治9年（1876）に立之に贈られたもの。

北蝦夷地からもたらされた「リコンカムイ」が、中国の本草書などに見える「麿」と同一の動物であると論じている。

3-14 麿麝考 6巻 (しょうじゃこう)



大淵常範纂 文久元 [1861] 凡例 刊本
資寿堂蔵版 2冊 【書庫 T86 : 139】
[田中芳男文庫]

大淵棟庵（常範、1816-1889）は江戸後期から明治時代の医師で本草家。博物学を祖父の栗本丹洲に学んだ。

本書は、「麝」（ノロジカ）と「麿」（ジャコウジカ）を「一類二種」とし、それぞれについて、多くの中国・日本の書籍から関連する図画や記述を転載し、まとめている。嘉永5年

(1852) に蝦夷移住を命ぜられた栗本匏庵 (1822-1897) の見聞に基づき、中国および日本の諸書を渉獵して検討を加えた結果、「利玖牟加毛以」は「麋」であると確信したことが、本書を著す大きな要因となった。

3-15 動物学 初篇 哺乳類 (どうぶつがく しょへん ほにゅうるい)



[ブロムメ著] 田中芳男訳纂 久保弘道校訂
中島仰山図画 明治7 [1874] 博物館蔵版
2冊 【書庫 T86:98】 [田中芳男文庫]

訳者田中芳男 (1838-1916) は、国立博物館及びその附属施設としての上野動物園の設立に尽力した。

本書は、ドイツ人ブロムメの博物図説から動物の部のみを抄訳したもの。系統的な構成で、各類の通説を載せている。この書に用いられた

分類はキュビエ (Georges Cuvier, 1769-1832) が規定したものに拠っているが、動植物の分類での「科」や「爬虫類」という語は、本書で初めて用いられたといわれる。計205の色彩画で動物が描かれ、行動、形状、産地等を簡略に記述している。

3-16 動物訓蒙 哺乳類 初編 (どうぶつくんもう ほにゅうるい しょへん)



田中芳男選 久保弘道校 中島仰山画 明治8
[1875] 博物館蔵版 1冊 【書庫 T86:96】
[田中芳男文庫]

本書は、中島仰山の筆になる総計82図の色彩画とともに、80種の動物の形状、行動、産地、効用等を説明している。動物の種類は内外産にわたっている。田中は序文で、動物学の理解を深めるために、上記「動物学」との併読を勧めている。

4 鯨 —日本の古式捕鯨と図説—

日本における鯨類の利用（食用・鯨骨製品）は、縄文時代から既にあったとされている。日本列島の各地でその痕跡が発掘され、考古学的にも定説化している。ただし捕鯨の始まりについては、諸説あり未だ定まってははいないといえる。

古代から中世にかけては、死んで浜に打ち上げられた鯨や、座礁や湾内に迷い込んだ鯨を捕獲したり、小型の鯨類を弓矢や網、銛、銛に綱をつけた道具を使って狩猟していたと考えられている。

近世になると「突取捕鯨」（銛のみ使用）、それに続く「網掛突取捕鯨」（銛と網の併用）といった狩猟技術の進歩により、中型・大型の鯨類の捕獲が可能となってきた。それに伴い「刺手組」・「鯨組」といった捕鯨専門集団による組織的な捕鯨が、紀州太地浦に始まり、土佐室戸の津呂、肥前の大村へと伝播し、全国に普及していった。このため、“産業”としての捕鯨が成立した時期は、概ね16世紀から17世紀初め頃と考えられている。

鯨や捕鯨に関する最初期の文書は、17世紀末の「見聞録」や「本草物」に断片的な記述を見ることができる。食物本草の『本朝食鑑』（小野必大 元禄八年（1695））や、日本の本草学の草分けとも云える貝原益軒の『大和本草』（宝永五年（1708））などに鯨に関する項目がみられる。異色なものでは、井原西鶴『日本永代蔵』（貞享五年（1688））の“天狗は家名の風車”に、紀の路大湊泰地の捕鯨の話があり、我が国初の工場制手工業といえる捕鯨産業の工程がほぼ正確に描写されている。

18世紀に入る頃から鯨の専門書といえる文書が登場してくる。現在のところ最も古い専門書とされているのは、『西海鯨鯢記』（谷村友三 享保五年（1720））で、それに続くのが『鯨志』（楳取屋次右衛門 宝暦十年（1760））となっている。初めての捕鯨史といわれていた『鯨記』（明和元年（1764）頃？）は、『西海鯨鯢記』の写本であることが判明している。また仙台藩儒学者大槻清準による『鯨史稿』（文化五年（1808））は全六巻からなり、捕鯨百科全書ともいえる内容で江戸鯨学の集大成といわれている。

鯨の専門書とともに図説も、捕鯨を見た者や鯨組主などの捕鯨に直接携わる者によって多く描かれた。唐津藩士木崎攸軒によって制作された『小兒乃弄鯨一件の巻』（安永二年（1773））は、肥前小川島の鯨組の様子を操業の順を追って描いている。その構成は、漁場、鯨の発見と伝達、道具、組織、鯨取の場面、納屋場、鯨の種類・部位、捌き方、利用法、儀礼としての羽差踊といった内容で、以後の鯨図説構成の基本となった。

さらに、肥前柏浦・黄島の鯨組主 生島仁左衛門の手による『鯨絵巻（鯨魚覽笑録）』（寛政八年（1796）頃）は、納屋場の詳しい作業風景や、捕鯨準備作業の様子が追加されている。この二つの絵巻をもとに様々な転写が繰り返され、捕鯨が盛んだった地域に残っている。現存する図説は、同名異本、異名同本と様々で、典拠記述もなく複雑である。江戸期における博物図譜の特徴である転写の連続は鯨図説にも顕著に表れている。

捕鯨産業の絶頂期にあった天保三年（1832）に発行された『勇魚取絵詞』（上・下巻と「鯨肉調味方」の3冊1組）は、単に肥前生月島の捕鯨手引書にとどまらず、また出版にいたる経緯にも、江戸文化成熟期の様子が窺える。即ち情報の収集、提供は生月島の捕鯨を見学を訪れる文人たちと交流のあった鯨組主益富又左衛門が行い、文章は江戸の国学者小川與清が執筆、そして出版事業に並々ならぬ情熱を注いだ平戸藩主松浦熙が関与して江戸で刷られたというものである。

以後、鯨に関する資料は明治期の出版へと引き継がれていく。

4-1 柳南鯨記 2巻（りゅうなんげいき）

谷村柳南編 井口言忠寫 田中芳男〔校〕 写本 折本 2帖 【貴重書 A00:5849】
〔田中芳男文庫〕

旧蔵者田中芳男氏の識語によれば、もとの一幅を二帖に分けた、木崎攸軒の『小兒乃弄鯨一件の巻』と同物であるが“序”と“羽差踊”が巻末に移されている、柳南の補説があるといったことが記してある。

おそらく氏が卷子を上・下2巻の折本に製本し直したと思われる。たしかに、木崎攸軒の捕鯨図と比べると、序文と羽差踊の場面は巻末に移動しており、他に“男鯨”“女鯨”の「開ノ元」の場面が欠落している。

編者柳南自身が補遺として加えている鯨群の絵と解説の、原本は不明である。

世美、長須などの鯨のほか、シャチ、イルカ、サメ、エイなども描かれていることから、おそらくは紀州の捕鯨図と思われる。



4-2 （南紀熊野浦魚者太地角右衛門所蔵）鯨魚種品圖目（げいぎょしゅひんずもく）

大原重株筆寫 享保20〔1735〕 写本 折本 1帖 【貴重書 A00:5850】 〔田中芳男文庫〕



本書には以下の添書き（旧蔵者田中芳男氏によるものか）が付されている。

「紀州熊野浦漁師太地角右衛門所蔵の原本へ享保二十年大原重株が寫したるもの熊野浦で捕獲される鯨群を記している」

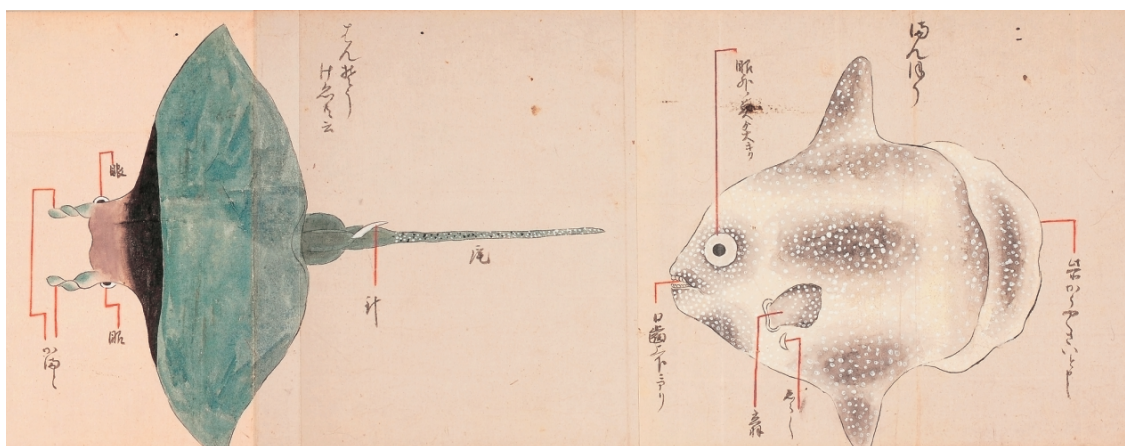
太地家は、「網掛突取捕鯨」技術の創案によって太地浦の捕鯨発展に大きく貢献した和田頼治が興した家である（井原西鶴『日本永代蔵』“天狗は家名の風車”で紹介された天狗源内も、彼がモデルと言われている）。頼治が使用した通称「角右衛門」はその後代々襲名されており、本書も幾代かの角右衛門によって所蔵されたのであろう。資料には捕鯨具3種と、11種の鯨が解説と共に描かれている。

4-3 (享保八年) 紀州熊野浦諸鯨之圖 (きしゅうくまのうらしょげいのず)

写本 折本 1帖 【貴重書 A00:5852】 [田中芳男文庫]

本書は、一帖の中に内容・紙質が異なる三種の資料が見られる。また資料の継ぎ目には、それぞれ旧蔵者田中芳男氏の筆とみられる付箋があることから、恐らく卷子などの体裁で別々に存在した以下1～3の資料を氏が合冊し折本として製本したものと思われるが、資料相互の関係性は不明である。

1. 末尾に「享保八年卯年御尋に付紀州熊野浦二分口役所において吟味之上書指上げ候魚之図 干時享保十五歳戌初夏写之」との識語があるため、これが折本の題箋が指す『紀州熊野浦諸鯨之圖』に相当すると思われる。資料には鯨のほか、サメ、イルカ、マンボウまで紹介されている。このように魚の種類が多岐にわたるのは、江戸期の紀州の捕鯨図にみられる特徴でもあるようだ。
2. 「以下は製装の際、加ふるものなり。明治十五年十二月」という氏の付箋に続き、エイが2点描かれている。末尾には「文政元年初秋三日伊嶋漁夫網海獲之」と読める識語が見える。
3. 「以下捕鯨 無記名の一巻なりし」との付箋に続き、捕鯨の様子が描かれている。巨大な鯨と対峙する漁夫達の姿は勇壮である。



参考文献リスト

1. 植物

- ・大場秀章『江戸の植物学』 東京大学出版会 1997
- ・白井光太郎「頭註國譯本草綱目序」(『新註校定国訳本草綱目』 春陽堂書店 1979)
- ・岡西為人『本草概説』 創元社 1977
- ・渡邊幸三「李時珍の本草綱目とその版本」(『東洋史研究』 12(4) 1953)
- ・大賀一郎「我が国に於ける最初の植物学書なる宇田川榕菴著『苦多尼訶経』に就て」(『植物及動物』 4(5)、4(6) 1936)
- ・矢部一郎『『苦多尼訶経』攷』(『立正大学教養部紀要』 (11) 1977)
- ・高橋輝和『シーボルトと宇田川榕菴：江戸蘭学交遊記』 平凡社 2002
- ・大場秀章「伊藤圭介」(『学問のアルケオロジー第1部』 東京大学出版会 1997)
- ・土井康弘「日本初の理学博士伊藤圭介(杏雨書屋第二十回研究会講演録「伊藤圭介来簡集」の知友・門人たち)」(『杏雨』 (11) 2008)
- ・吉川芳秋「五十才で発起し西説『草木図説』を出版した美濃大垣の医家飯沼慾齋翁(愛知県医資料)」(『現代医学』 21(1) 1973-07)
- ・吉川芳秋「日本ではじめて洋説によつて植物を図説した大垣の飯沼慾齋-1・2-」(『採集と飼育』 14(12) 1952)
- ・児島薫「服部雪斎 博物図譜の名手」(『文明開化のはざまに』 ぺりかん社 2008)
- ・磯野直秀「日本博物学史覚え書 IX」(『慶応義塾大学日吉紀要. 自然科学』 (28) 2000)
- ・磯野直秀「日本博物学史覚え書 X」(『慶応義塾大学日吉紀要. 自然科学』 (29) 2001)
- ・磯野直秀「日本博物学史覚え書 XIII」(『慶応義塾大学日吉紀要. 自然科学』 (35) 2004)
- ・北村四郎、塚本洋太郎、木島正夫『本草図譜総合解説』全4巻 同朋舎出版 1986-1991
- ・ウエインマン画、木村陽二郎解説『美花図譜：ウエインマン「植物図集選」』 八坂書房 1991
- ・白井光太郎『白井光太郎著作集 第3巻 園芸植物と有用植物』 科学書院 1986
- ・塚本洋太郎「日本の本草書と園芸書」(『日本史研究』 (4) 1991)
- ・三之丞伊藤伊兵衛「花壇地錦抄・草花絵前集」(『東洋文庫』 288 平凡社 1976)
- ・白幡洋三郎「本草学と植物園芸」(『東アジアの本草と博物学の世界』 下 思文閣出版 1995)
- ・塚本洋太郎「〈共同研究報告〉日本の本草書と園芸書」(『日本研究』 (4) 1991)
- ・水谷泰弘「江戸の園芸書から」(『名古屋大学言語文化研究叢書』 第2号 2003)
- ・「民間備荒録(解説編)；備荒草木図(解説編)」(『近世歴史資料集成』；第5期9巻 救荒；2 科学書院 2008)
- ・白杉悦雄「民間備荒録の世界：救荒植物の発見」(『東北学』 vol. 8, 2003)
- ・白杉悦雄「日本における救荒書の成立とその淵源：建部清庵『民間備荒録』を中心に」(『東アジアの本草と博物学の世界』 上 思文閣出版 1995)
- ・白杉悦雄「救荒本草」考 (『中国思想史研究』 第19号 1996)
- ・菊池勇夫「山野河海と救荒」(『弘前大学國史研究』 93 1992)
- ・菊池勇夫「近世中期における救荒システムの転換：仙台藩の宝暦飢饉を事例に」(『キリスト教文化研究所研究年報』 33 1999)
- ・佐々木隆美『名古屋叢書三編』19巻 解説 名古屋市教育委員会 1982
- ・白井光太郎「森立之」(『白井光太郎著作集』 第5巻 植物採集紀行・雑 科学書院 1988)
- ・川瀬一馬「森立之・約之父子」(『日本書誌学之研究』 大日本雄弁会講談社 1943)
- ・川瀬一馬「森立之の「枳園漫録」」(『日本書誌学之研究』 大日本雄弁会講談社 1943)
- ・川瀬一馬「御目見医師講義聴聞「躋寿館出席留」」(『日本書誌学之研究』 大日本雄弁会講談社 1943)
- ・大塚恭男「森立之」(『近世漢方医学書集成』 53 名著出版 1981)
- ・上野益三『日本博物学史』 平凡社 1973
- ・磯野直秀『日本博物誌年表』 平凡社 2002
- ・大場秀章編『日本植物研究の歴史：小石川植物園300年の歩み』(東京大学コレクション4 東京大学総合研究博物館 1996)
- ・『東アジアの本草と博物学の世界』 上・下 思文閣出版 1995
- ・磯野直秀「資料別・草木名初見リスト」(『慶応義塾大学日吉紀要』 自然科学 No.45 2009)
- ・白井光太郎『白井光太郎著作集 第1巻 本草学・本草史研究』 科学書院 1985

- ・高橋達明「小野蘭山本草講義本編年攷」（『東アジアの本草と博物学の世界』下 思文閣出版 1995）
- ・北村四郎「〈共同研究報告〉中国植物に関する日本の研究」（『日本研究』3号 1990）

2. 虫—虫譜と本草学研究会—

- ・日本学士院編『明治前日本生物学史』第1巻 日本学術振興会 1960
- ・フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト著 斎藤信、金本正之訳『日本』第3巻 雄松堂書店 1978
- ・栗本丹洲『千蟲譜』恒和出版 1982（『江戸科学古典叢書』41）
- ・上野益三『日本博物学史』補訂版 平凡社 1986
- ・『彩色江戸博物学集成』平凡社 1994
- ・『学問のアルケオロジー』東京大学 1997（『学問の現在・過去・未来』第1部）
- ・富山市郷土博物館編『特別展 お殿さまの博物図鑑—富山藩主前田利保と本草学—』富山市教育委員会 1998
- ・遠藤正治『本草学と洋学—小野蘭山学統の研究—』思文閣出版 2003
- ・国立国会図書館編『描かれた動物・植物—江戸時代の博物誌—』国立国会図書館 2005

3. 動物

- ・梶島孝雄著『資料日本動物史』八坂書房 1997
- ・山田慶兒編『物のイメージ：本草と博物学への招待』朝日新聞社 1994
- ・上田正昭・西澤潤一・平山郁夫・三浦朱門監修『日本人名大辞典』講談社 2001
- ・長友千代治著『近世上方作家・書肆研究』東京堂出版 1994
- ・上田淑子「栗原柳菴に就いて（文学遺跡巡礼 国学篇58）」（『學苑』9巻1号 1942）
- ・磯野直秀著『日本博物誌年表』平凡社 2002
- ・今泉実兵「厩馬新論の研究 1」（『獣医畜産新報』367 1964）
- ・田中秀雄著『田中芳男は何をした人か』田中芳男の胸像制作等を願う市民会議：田中芳男を知る会 2008
- ・上野益三著『博物学者列伝』八坂書房 1991
- ・磯野直秀・内田康夫「『唐蘭船持渡鳥獸之図』の研究」（『慶應義塾大学日吉紀要。言語・文化・コミュニケーション』第7号 1990）
- ・西村三郎著『文明のなかの博物学：西欧と日本』紀伊國屋書店 1999
- ・菊池俊彦「解説」（『紅毛雑話・蘭畹摘芳』江戸科学古典叢書31 恒和出版 1980）
- ・上野益三「解説」（『博物学短編集〈上〉』江戸科学古典叢書44 恒和出版 1982）

4. 鯨—日本の古式捕鯨と図説—

- ・福本和夫著『日本捕鯨史話』法政大学出版局 1960
- ・森田勝昭著『鯨と捕鯨の文化史』名古屋大学出版会 1994
- ・中園成生、安永浩著『鯨取り絵物語』弦書房 2009
- ・森弘子、宮崎克則著「文化5年、大槻清準『鯨志稿』成立の政治的背景」（『西南学院大学国際文化論集』25(2)、53-82 西南学院大学学術研究所 2011）
- ・森弘子、宮崎克則著「天保3年『勇魚取絵詞』版行の背景」（『九州大学総合研究博物館研究報告』No.8 1-16 2010）
- ・人見必大著、島田勇雄訳注『本朝食鑑』（東洋文庫）平凡社 1976-1981
- ・貝原益軒著、益軒会編『益軒全集』巻之6 益軒全集刊行部 1910-1911
- ・『西海鯨鯢記』（平戸市の文化財 11）平戸市教育委員会 1980
- ・『農業・製造業・漁業』（日本科学古典全書／三枝博音編；復刻 6）朝日新聞社 1978 [山瀬春政著『鯨志』所収]
- ・[井原西鶴著] 谷脇理史、神保五彌、暉峻康隆校注・訳、『日本永代蔵；万の文反古；世間胸算用；西鶴置土産』（新編日本古典文学全集68 井原西鶴集3）小学館 1996
- ・大槻清準 [著]『鯨史稿』（江戸科学古典叢書2）恒和出版 1976
- ・宮本常一、原口虎雄、長谷川健一編『農山漁民生活』（日本庶民生活史料集成 第10巻）三一書房 1970 [『勇魚取絵詞』、『肥前州物産圖考（小兒乃弄鯨一件の巻）』所収]
- ・山田慶兒編『東アジアの本草と博物学の世界』上・下 思文閣出版 1995
- ・朝日新聞社編『朝日日本歴史人物事典』朝日新聞社 1994

展示資料リスト

資料番号	タイトル	著者等	請求記号	備考
1-1	江西本草綱目	李時珍著	書庫 T81: 9	青洲文庫
1-2	菩多尼訶經	宇田川榕菴著	書庫 T83: 412	
1-3	植学啓原	宇田川榕菴著	書庫 T83: 5	
1-4	泰西本草名疏	伊藤圭介著	書庫 T83: 59	
1-5	新訂草木図説草部	飯沼慾斎著	書庫 T83: 131	田中芳男文庫
1-6	経方真図	服部雪斎画	貴重書 A00: 6521	鶉軒文庫
1-7	御薬苑草木写占稿	坂本浩雪画	貴重書 A00: 4603	南葵文庫
1-8	草木写占底稿	坂本浩雪画	貴重書 A00: 4604	南葵文庫
1-9	本草図譜	岩崎灌園著	貴重書 A00: 5911	田中芳男文庫
1-10	草花絵前集	伊藤伊兵衛三之丞画、伊藤伊兵衛政武注	書庫 T83: 83	南葵文庫
1-11-1	花壇地錦抄	伊藤伊兵衛（三代）三之丞著	書庫 T83: 62	
1-11-2	増補地錦抄	伊藤伊兵衛（四代）政武著・画	書庫 XA70: 226	鶉軒文庫
1-11-3	広益地錦抄	伊藤伊兵衛（四代）政武著・画	書庫 XA70: 225	鶉軒文庫
1-11-4	地錦抄附録	伊藤伊兵衛（四代）政武著・画	書庫 XA70: 117	田中芳男文庫
1-12	草木奇品家雅見	種樹家金太撰	貴重書 A00: 4507	青洲文庫
1-13	民間備荒録	建部清庵	書庫 XA20: 1226	
1-14	備荒草木図	建部清庵	書庫 T81: 66	田中芳男文庫
1-15	周定王救荒本草和名撰	曾湜（占春）著	貴重書 A00: 5921	田中芳男文庫
1-16	救荒本草紀聞	田村元雄（藍水）述	貴重書 A00: 5915	田中芳男文庫
1-17	救荒本草記聞	岩（岩永）澄元著	貴重書 A00: 5916	田中芳男文庫
2-1	砂梭子・蠟蛸圖説	萬香亭（前田利保）[編]	貴重書 A00: 5846	田中芳男文庫
2-2	本草綱目	李時珍 [撰] 稻若水訂補	書庫 T81: 44	
2-3	丹洲蟲譜	[粟本] 丹洲 [著] [服部] 雪斎 [画]	貴重書 A00: 5843	田中芳男文庫
2-4	啓蒙蟲譜圖	[前田利保編]	書庫 T86: 61	南葵文庫
2-5	蟲譜圖説	[飯室昌羽著]	書庫 T86: 181	焼け残り本
2-6	蟲豸類圖 附獸類圖	吉田雀巢庵主人遺稿 田中芳男 [編]	貴重書 A00: 5854	田中芳男文庫
2-7	蟲譜	[吉田雀巢庵著]	貴重書 A00: 5848	田中芳男文庫
2-8	重訂本草綱目啓蒙	小野蘭山口授 小野職孝録 井口望之訂	書庫 T81: 6	青洲文庫
2-9	物品識名	水谷豊文 [編]	書庫 T81: 274	南葵文庫
2-10	蜻蜓譜	吉田高憲（雀巢庵）著	書庫 T86: 115	田中芳男文庫
2-11	蟲豸圖譜	[田中芳男自筆]	貴重書 A00: 5847	田中芳男文庫
2-12	蟲豸圖譜		書庫 T86: 180	焼け残り本
3-1	象志		書庫 T86: 111	田中芳男文庫
3-2	象のみつき	中村平五撰・画	書庫 T86: 176	田中芳男文庫
3-3	橐駝考	它山唐公愷稿 安西武臣虎吉校	書庫 T86: 120	田中芳男文庫
3-4	橐駝纂説	松本胤親輯	書庫 T86: 119	田中芳男文庫
3-5	雲錦隨筆	暁晴翁著 [松川半山画]	書庫 A90: 453	
3-6	蒹葭堂雜録	[木村蒹葭堂稿] 暁晴翁撰 松川半山画	書庫 鷗 A90: 299	鷗外文庫
3-7	蘭畹摘芳	[大槻] 磐水先生訳定 [大槻] 玄幹 山村才輔校 吉川良祐 [ほか] 筆録	書庫 A90: 898	田中芳男文庫
3-8	紅毛雜話	森島中良編輯	書庫 J70: 117	南葵文庫
3-9	古今名馬図彙	栗原信充（柳庵）編・画	書庫 T86: 168	南葵文庫
3-10	華陽皮相・華陽皮相原稿	平沢旭山著	書庫 T86: 112	田中芳男文庫
3-11	厩馬新論	龍山堂主人著	書庫 XA60: 42	南葵文庫
3-12	北蝦夷圖説	間宮倫宗口述 秦貞廉編 橋本玉蘭齋 重探齋画	書庫 J30: 881	南葵文庫
3-13	麋説	栗本瑞見著	貴重書 A00: 5841	田中芳男文庫
3-14	麋麇考	大淵常範纂	書庫 T86: 139	田中芳男文庫
3-15	動物学初篇哺乳類	[フロム×著] 田中芳男訳纂 久保弘道校訂 中島仰山図画	書庫 T86: 98	田中芳男文庫
3-16	動物訓蒙哺乳類初編	田中芳男選 久保弘道校 中島仰山画	書庫 T86: 96	田中芳男文庫
4-1	柳南鮠記	谷村柳南編 井口言忠寫 田中芳男 [校]	貴重書 A00: 5849	田中芳男文庫
4-2	(南紀熊野浦魚者太地角右衛門所蔵) 鯨魚種品圖目	大原重株筆寫	貴重書 A00: 5850	田中芳男文庫
4-3	(享保八年) 紀州熊野浦諸鯨之圖		貴重書 A00: 5852	田中芳男文庫

平成23年度附属図書館所蔵資料展示委員会 委員名簿

委員長 北村 照夫 (附属図書館情報サービス課長)
吉田左貴子 (附属図書館情報管理課専門員)
高嶋 秀介 (附属図書館情報サービス課専門員)
大澤 正男 (附属図書館情報サービス課専門員)
鈴木 剛紀 (附属図書館総務課企画渉外係主任)
石川 一樹 (附属図書館情報管理課主査)
飯塚 亜子 (附属図書館情報サービス課参考調査係長)
木下 直 (大学院法学政治学研究科・法学部研究室図書受入係長)
中村 恭子 (農学生命科学図書館図書情報担当係長)
廣瀬 朋美 (附属図書館情報サービス課利用者サービス係)

この展示はインターネットでもご覧になれます。

(<http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/tenjikai/tenjikai2011/index.html>)

江戸 いきもの彩々

—総合図書館貴重書展—

主催 東京大学附属図書館

平成23年10月28日発行

編集 東京大学附属図書館所蔵資料展示委員会

発行 東京大学附属図書館

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

電話03-5841-2640 (情報サービス課)

